

関東地区(埼玉県)：井上里香(学校法人梅澤学園わかほ幼稚園副園長)  
小川佳奈子(わかほ幼稚園教諭)

## 1. 研究発表テーマ

### インクルーシブ保育を考える

#### — 毎日の生活や行事を通して育つ思いやりの心

インクルージョンでは、子どもは一人ひとりユニークな存在であり、一人ひとり違うのが当たり前であることを前提として、すべての子どもを包み込む教育システムの中で、一人ひとりの特別なニーズに応じた教育援助を考えることにある。

その考えを基に、気になるお子さんたちと一緒に育つ生活環境による、子どもたちの3歳から5歳までの思いやりの育ちや、運動会などの行事で芽生える思いやりの心を事例を通して提案したい。

## 2. 幼稚園の概要

### (1)環境

東京のベットタウンであり、マンション住まいが9割を占める。埼京線中浦和駅までに徒歩8分の所にあるが、まだ自然が残っていて、子どもたちは、ダンゴムシやトカゲ、カマキリ、クワガタの幼虫等やタンポポなどで遊べる環境がある。雑草園がある。

### (2)保育者の態勢

- ・園児数133名
- ・気になるお子さん20名程
  - ┌ 言語発達遅滞・注意欠陥多動症(ADHD)・知的障害・自閉症スペクトラム
  - └ 知的発達の遅れ・脳性麻痺・ダウン症・経過観察
- ・年少、年中、年長組各2クラスずつで、担任は1クラス1名ずつ。補助の保育者が2～4名入っている。
- ・教職員13名
  - パートの保育者(9時～14時勤務)14名  
(原則週4日間、年間103万円以内でおさえてもらっています。)
  - パートの保育者14名と常勤保育者4名も気になるお子さんを補助する。

### (3)入園する時の条件

- ┌ ◎幼稚園は療育機関ではないので、必ず、療育機関に通っていただく。
- └ ◎入園して6月に県に申請書類(補助金)を出していい方。
- ・入園後は、すぐの懇談会でクラスの保護者の方にお子様の話をしてもらう。

### (4)補助金(私立幼稚園等特別支援教育費補助金)

- (今年度) 国(県)の補助金 1名につき784,000円×18名  
さいたま市の気になるお子さんの補助金 1名につき392,000円×2名

### (5)療育機関との連携

- ・さいたま市(公立)療育センター「さくら草」  
ほとんどの子が療育を受けている。(グループ療育、OT、ST)
- ・さいたま市杉の子園のフォロークラス(週1回水曜日14時30分～16時30分)

グループ療育を行っている。

- ・さいたま市訪問カンファレンス

親の申請で年2回。一回につき親負担1,000円程度。

9時～14時保育を観察していただき、14時～15時に担任、園長、担当の保育者とでカンファレンスをしていただく。

- ・社会福祉法人さくらとぴあ 指導員の方に年間5～6回、指導に来ていただく。

#### (6) 小学校との連携

- ・就学相談(さいたま市教育委員会指導二課)

年長の一学期に担当の主事さんがつく。親との相談、幼稚園に来園し保育の様子を観察して、後日、親へ教育委員会としての判断を伝えている。

- ・幼保小連絡協議会

6月、2月、に一年生の授業参観、意見交流会。

個別に入学後配慮してほしい事を伝達してくる。特別支援学級に入る子も、幼稚園から小学校に連絡をとり、必ず、園長、担任、担当保育者で伝達をしている。

特別配慮を必要としている子に関しては、4月に入ってから、直接担任の先生に伝達している。

#### (7) 工夫している点

- ・パートの保育者の担当する子

パートの保育者が週4日なので、お休みであいてしまう子がでるため、ホワイトボードに名前を記入しておき、前日副園長が保育者のネームカードをはっておく。

一目瞭然に手の足りない所がわかるのでお勧めです。

- ・親とのトラブルの時

気になるお子さんがけがをさせてしまった時

まず、幼稚園としてあやまる。その上で相手の親の話をじっくり聞く。

こちらから、その子の持っている特性を話すのと同時に、

『気になる子の保育』(チャイルド本社出版 徳田克己監修 水野智美編集)の本のあてはまるページをコピーして、詳しく説明する。そこには、どう対応していけばうまくいくという文章も書かれており、幼稚園もどう対応し、これから対処していくかを前向きに考えていただけるよう話をしている。

インクルーシブ保育で、子どもたちが、やさしさや思いやりを育ててもらっていることも話す。

#### (8) 課題

- ・クラスの中での担任とパートの保育者とのかねあいが難しい場合がある。

保育観の相違等。

- ・訪問カンファレンスの回数が年間5回あると理想的。

子どもたちの発達にあわせると。

### 3. 事例

学校法人 梅澤学園 わかほ幼稚園

小川佳奈子

#### (1) A男を中心とした3歳から5歳の発達

→6月生まれ 父、母 3年保育

ADHDであり、衝動性が高い。年長2学期まで補助の保育者がついている。

①年少時のクラスの実態（男児12名 女児8名 計20名）

担任は一人だが、補助の保育者が数人いる。初めての園生活に緊張や不安を抱きながらも、保育者や友だちと一緒に遊ぶことをのびのびと楽しんでいる。

<1学期>好きな遊びのとき

A男は、戸外で自分のしたい遊びを探している。すると、サッカーゴールの近くで遊んでいたB男のボールがA男の近くに転がってくる。

子どもの姿	保育者の関わり・思い
A男が転がってきたボールで遊び始める。	
B男「それ、ぼくのだよ！」 と大きな声でA男に言う。	B男の声に気づき、2人の傍に駆け寄る。
A男「違うよ、これはぼくが見つけたんだよ！」 と言い、少し表情が硬くなる。	A男の表情の変化に気づき、手が出てしまった際すぐに止められるよう注意しながら、言葉で伝え合おうとする2人のやりとりを見守る。
B男「違うよ！ぼくのだよ！」 と怒った口調でA男に言う。	（B男の口調にA男も怒ってしまうのではないかな…）
A男「ぼくのだってばー！」 と大きな声言いながらB男の体を両手で押し、そのまま掴みかかろうとする。	手が出てしまったタイミングでA男を補助の保育者が、B男を担当が引き離し、まずはお互いの気持ちが落ち着くようにする。

その後、A男は大きな声を出したり、補助の保育者を叩いたりしながら気持ちを発散させていき、落ち着いてから再び自分のしたい遊びを始めた。遊びの中でB男と出会ったとき、保育者が見守る中で「ごめんね」「いいよ」と伝え合うことができた。

（保育者の思い）

自分の気持ちを言葉で伝えたい思いは感じるが、大きな声や怒られているような空気に過敏に反応し、手が出てしまう様子が伺える。まずはA男の気持ちが落ち着くよう保育者が寄り添い、一対一で話せる環境が必要ではないかと考える。また、保育者同士で相談し、A男が落ち着けるようなクールダウンスポットを探し、促しながら、少しでも早く気持ちを切り替えられるよう援助していきたい。

<A男の友だちとの関わり>

友だちのことが大好きなA男は、自分から積極的に友だちのしている遊びに加わるが、楽しく遊んでいる中でも衝動的に手が出たり、物を投げたり、その場から走っていなくなってしまうことある。A男の友だちと関わりたい気持ちに反して、それらの行動を見て“怖い”“いじわる”などというイメージを持ち、少し距離を取る子どももいる。

（保育者の思い）

衝動的な行動はA男の特性なので、個性の一つとして受け止め、自分自身で気持ちをコントロールできなくなったときは保育者がクールダウンスポットへ促し、周りの子どもたちの目に触れない

よう配慮することでイメージがつきにくくなったように感じる。イメージではなく、一緒に過ごす中で一人ひとりが友だちの良いところや好きなところを見つけていけるよう、それぞれの良さをその都度子どもたちに伝えるなどの工夫を心がけていきたい。

＊考察＊

初めての集団生活の中で、些細なことでも衝動が抑えられず手が出てしまうなどの姿がたくさん見られた。自分で気持ちをコントロールできなくなってしまうため、担任と補助の保育者が連携を取りながら、クールダウンスポットへ促すなど、A男と一対一で話せる環境をつくるのが大切だとわかった。友だちとの関わりが広がるよう、保育者が傍にいて一緒に遊ぶ経験やトラブルの経験を重ねていくことがA男の成長につながるのではないかと考える。

②年中時のクラスの実態（男児17名 女児10名 計27名）

担任は一人だが、補助の保育者が数人いる。友だちとの関わりが深まり、気の合う友だちと一緒に遊ぶことを楽しんでいる。また、気持ちのすれ違いからトラブルも増えてくる。

<2学期>生活発表会に向けて劇の練習をしているとき

セリフをしっかりと覚えて王子様役を引っ張ってくれるA男だが、遊戯室にある舞台での練習になると、マイクがとても気になり始める。（クラスで、マイクには触らない約束をしている。）

子どもの姿	保育者の関わり・思い
<p>A男はセリフを言う度に、マイクに近づいたり触ったりしようとする。</p>	<p>担任は舞台の下で全体の様子を把握し、補助の保育者は幕の中でA男を見守っている。</p> <p>（A男は、劇ではなくマイクに意識が向いている。もっと劇に集中できたらいいな…）</p> <p>「Aくん、今日も王子様役かっこいいよ！」と言葉をかけ、引き続き見守る。</p>
<p>隣りに立っていたC男にぶつかりそうになり、 A男「ごめんね」 と自分から声をかけ、マイクから少し離れる。</p>	<p>（このまま劇に気持ちが向くといいな…）</p>
<p>お客さんとして見ていたD男が D男「A男くん！マイク触らないよ！」 と大きな声で言う。</p>	<p>（教えてあげようとするD男の思いやりや正義感は嬉しいが、D男の言葉にA男は落ち着かなくなってしまうのではないかな…）</p>
<p>A男「もー！触ってないのに！」 と言いながら、舞台から降りてD男を1回叩き、そのまま走って行ってしまった。</p>	<p>補助の保育者がA男の後を追う。</p>

A男は自分で静かな場所を見つけ、「ぼくは何もやってないのに！」と言いながら補助の保育者と一対一で話し、少しずつ気持ちを落ち着かせた。遊戯室に戻るとD男のもとへ行き、「何もしてないからね！」と伝えた。担任は「おかえり」とあたたかく迎え、クラス全体でもう一度舞台での約束を確認し、この日の練習を終わらせた。

（保育者の思い）

A男の姿から、自分で考えて行動しようとする様子が見られるようになり、成長が伺える。また、常に体を揺らすなど、集団で活動することに落ち着かない素振りも見せるため、どうしたら落ち着いて過ごせるか、A男自身の中に葛藤が生まれているように感じる。大きな声に過敏に反応する姿もまだ見られるので、引き続き、補助の保育者と連携を取りながら援助していきたい。

#### <A男とE子の関わり>

E子：1月生まれ 父、母 3年保育

ADHDであり、多動性や衝動性が高い。常に補助の保育者がついていて、理由の有無に関係なく、突発的に手が出たり物を投げたりするため、友だちとのトラブルも多い。しかし、遊びのアイデアが豊富なので、A子の遊びに興味を示し、一緒に遊びを楽しむ子どももたくさんいる。

A男は友だちと一緒に遊びたい気持ちを抱きながらも、自分から言葉で誘うことができず、ブランコや虫探しなど、一人でじっくりと遊ぶことが多い。しかし、E子の遊びの面白さに興味を持ち始めると、一日を通してE子と一緒に過ごす時間が増えていき、自然と友だちとの関わりも広がってきた。友だちとの関わりが増えることでトラブルになることも多いが、だんだんと怒りながらも自分の気持ちを言葉で伝えようとする姿が多く見られるようになってきた。友だちから「Aくん、一緒に遊ぼう！」と誘われることも増えていった。

#### (保育者の思い)

E子と一緒に過ごすことで遊びが面白くなり、友だちとの関わりも増えたため、A男は安心感を抱きながら充実した時間を過ごせるようになったと感じる。また、自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の気持ちを考えたりしようとする面が育ってきているので、これからもA男の良さや成長を認め、褒めながら伸ばしていけるよう心がけていきたい。

#### \*考察\*

園生活を過ごし、友だちと関わる中で、特定の友だちにはまだ手が出てしまう姿が見られた。また、集団の中にいることが苦手であり、A男自身で葛藤する姿も見られるようになった。その都度、保育者がA男の気持ちに寄り添い、一緒にクールダウンスポットを探したり、体を動かして気持ちを発散させたりしながら、A男のペースで集団活動に参加できるよう援助していくことが大切なのではないかと考える。集団活動に参加することで、友だちもA男の良さや個性を理解し、自然と友だち関係を築いていけることがわかった。これからもA男の思いや育ちをあたたく認め、言葉にして褒めることで、自己肯定感を育み、更に成長していくのではないかと考える。

#### ③年長時のクラスの実態（男児18名 女児10名 計28名）

担任は一人だが、補助の保育者が数人いる。年中時の2クラスでクラス替えを行い、進級当初は年長になった喜びを感じながらも、新しい環境に緊張や戸惑いを感じている子どもが多い。しかし、一緒に活動し、遊ぶ中で、自然と新しい友だちとの関わりが広がり、徐々に深まってきている。

#### <進級当初>

A男も年長になれた喜びと緊張を感じている。一斉活動が増えてくると落ち着かない様子も見られたが、補助の保育者が「Aくん、ちょっと外で体を動かしてくる？」などと声をかけると、「あ〜もう、違うんだよ…」と葛藤するようになる。時々、A男自身から「先生は来ないで！」と言って保育室を出てしまうことがあるが、保育者が遠くから見守っていると少し落ち着いてから保育者の

もとへ戻り、一緒に活動に参加できる姿も見られるようになってきた。

(保育者の思い)

年中までは、落ち着かないときに保育者と一緒にA男が落ち着ける環境を探し、クールダウンしていたが、どうすれば落ち着けるのかをA男自身が考えられるようになってきたと感じる。保育者同士で話し合い、A男の発達段階を共通理解しながら、声をかける援助だけでなく、状況に応じて見守る関わりも試していきたい。

<2学期>運動会の踊りの練習のとき

A男と同じグループのF男が黙って座り込んでしまう。保育者は、グループの友だち同士で声をかけ合いながらF男の気持ちが練習に向くといいなと思い、様子を見守っている。

子どもの姿	保育者の関わり・思い
A男「Fくん、一緒にやろう？」 と優しく声をかける。  F男はA男のことをちらっと見るが、座り込んだままいる。  A男「かなこ先生、Fくんどうするの？」 と担任に相談する。  A男「Fくん、おれと一緒にやろう？」 と手を差し伸べる。 すると、F男は下を向いたままA男と手をつなぎ、立ち上がる。	(A男が率先して声をかけてくれた！F男もA男の言葉で気持ちが切り替わるといいな…) 引き続き、子どもたちを信じて見守る。    (A男の思いやりを大切にしたいな…) 「AくんがFくんと手をつないで一緒に歩いてみるのはどうかな？」 と提案する。   (A男を信じて、お願いしてみてよかった！) 「Aくん、声をかけてくれてありがとう！FくんもAくんと一緒に楽しく踊ろうね！」 と言葉をかけ、練習を始めた。

翌日以降も、練習がある度にA男は「Fくん、一緒に行こう！」と誘い、F男も自然と踊りを楽しめるようになっていった。A男は、F男が参加できるように意識しすぎると自分自身が隊形移動を忘れてしまうこともあったが、G子が「Aくん、こっちだよ」と優しくフォローする姿も見られた。

(保育者の思い)

子どもたちを信じ、見守る中で、A男が率先して声をかけてくれたことに成長が伺える。F男は友だちから誘ってもらえる嬉しさを感じられたから楽しく参加できるようになり、A男はF男のことを任せてもらえた責任感が自信となり、より意欲的に取り組めたように思う。また、子ども同士の間に、友だちが困っているときに力になろうとする思いやりの気持ちや、あたたかい友だち関係がしっかり芽生えていると感じられる。これからも子どもたちの育ちを信じて見守り、必要に応じて介入しながら、一人ひとりの成長を支えていけるよう心がけていきたい。

\*考察\*

3年間の園生活を経て、A男自身で自分の気持ちをコントロールしたり、友だちの思いに気づき、力になろうとしたりする姿がたくさん見られるようになった。また、3学期から補助の保育者を外したことにより、困ったときに担任のところへ相談しに來たり、自分から積極的に友だちのしている遊びに加わったり、自分で考えて判断し、行動する姿も多く見られた。保育者から信じてもらい、友だちから自分の良さを認めてもらえることがA男の自信につながり、豊かな自己肯定感が育まれたのではないかと考える。A男だけでなく、友だちと一緒にさまざまな経験を重ねることで相手の気持ちや個性を知り、お互いを認め合える友だち関係や思いやりの心が育っていくこともわかった。そのため、保育者同士が日々の子どもの様子話し合い、一人ひとりの発達段階を共通理解し、信じて見守ることも保育者として大切な関わりの一つではないかと考える。

(2) 行事を通して育つ思いやりの心

①H男：6月生まれ 父、母 2年保育

自閉症であり、補助の保育者がついていて、自分のしたい遊びを見つけてじっくりと楽しむ反面、興味のないことに対してはすぐに集中がとぎれてしまう。

<年長一9月>運動会のリレーに向けての練習のとき

4チームに分かれて練習していく中で、H男のいる白チームだけ一度も1位を取れずにいる。

(H男の発達段階に配慮し、走る距離を短く設定している。)

子どもの姿	保育者の関わり・思い
<p>白チームの中で、H男がいるから一度も1位にならないのではないかと気持ち生まれ、 I男「かなこ先生、H男って他のチームになつたりできないの？おれも勝ちたい！」 と保育者に言う。</p>	<p>(どうしたら1位を取ることができるかをチームのみんな話し合いながら練習に取り組んでほしいな…) 子どもたちの思いやI男の発言を受け止めつつ、見守る。</p>
<p>I男の言葉を聞いたJ男がすぐに J男「I男、そうじゃないだろ！じゃあ、ぼくが白チームになって絶対に1位取る！I男、チーム代わって！」 と言い、保育者にもチームを交代してもいいかお願いする。</p>	<p>(J男の分け隔てない思いやりの気持ちや正義感がより育ってきている、もっと伸びてほしいな) 「今日からJくんとIくんがチームを交代してみようか！」 とJ男の気持ちを尊重する。</p>
<p>J男「かなこ先生、ありがとう！ちょっと白チーム集合しようよ！」 とすぐに声をかけ、話し合いを始め、足の速い2人がH男の前後を走ってみたらどうかと提案する。 J男の言葉を聞いたチームの子どもたちも 「それ、いいと思う！」 と言い、気持ちが前を向き始める。</p>	<p>(J男がリーダーシップを発揮して、子ども同士でしっかりと話し合いができていいるな) あえて言葉をかけずに、話し合いの様子をそっと見守る。</p>

J男「ぼくがH男からバトンをもらって他のチームのみんなを抜かすよ！」

と言うと、

K子「じゃあ、私もいっぱい走ってH男にバトン渡そうかな！」

と言い、相談しながら走る順番を決めた。

白チーム全員で

「走る順番が決まったよ！」

と保育者に伝える。

「うん！みんなでリレーしよう！」

とJ男が言い、新しいチームでの練習が始まった。

（いつも控えめなK子も自分から気持ちを伝えることができた！子ども同士で話し合えると信じて、見守っていてよかった！）

子どもたちの意欲を大切に受け止め、「これから走ってみる？」と提案する。

はじめは3位が続いていたが、「H男頑張ったね！」「次こそ1位取ろう！」などと声をかけ合う姿がたくさん見られた。そして、作戦を立てながら諦めずに練習を重ね、1位を取ることができた。他のチームからも「おめでとう！」と拍手をもらい、白チームの子どもたちは自信に満ちた表情を見せ、ハイタッチをしたり嬉し涙を流したりしながら喜んだ。

（保育者の思い）

話し合いの様子から、日々の生活の中でH男の良さや個性を理解し、肯定的に認めていたからこそ、J男もK子も自然と“H男の力になりたい”と思えたように感じられる。また、白チームが1位を取れたときに周りの子どもたちからも自然と「おめでとう！」と拍手が起きたことから、白チームが何度も話し合い、諦めずに取り組んできた努力を認めるあたたかい気持ちが一人ひとりに育まれたように感じる。これからも子どもたちの思いを大切に受け止め、一緒に悩んだり喜んだりしながら、一人ひとりの良さや個性を伸ばしていきたい。

②L男：8月生まれ 父、母、弟 3年保育

ダウン症であり、補助の保育者がついている。集団活動は苦手であるが、歌や踊りが大好きで、好きな遊びの中でも表情豊かにのびのびと楽しんでいる。

M男：6月生まれ 父、母 2年保育

脳性麻痺であり、補助の保育者がついている。状況に応じて、車いすと歩行器を使い分けながら生活している。

<年長一12月>生活発表会の踊りのとき

踊りの中で隊形移動があり、M男は一人で移動することが難しく、同じクラスのD男が責任をもってフォローしていた。L男は歌や踊りが大好きではあるが、全体練習のときには気持ちが向かないこともあり、保育者と一緒に遊びを通して楽しみながら踊りを覚えていった。予行練習を終えると、L男も進んで全体練習に参加するようになった。そして当日、一緒に踊っている中でM男がうまく移動できていないことにL男が気付くと、言葉をかけながらM男の立ち位置まで一緒に移動してくれた。また、今まで他の友だちが手伝おうとするとD男は「おれの仕事なのに！」と怒っていたが、何も言わずにL男に譲ってくれた。



(保育者の思い)

集団活動をあまり好まないL男にも楽しく取り組んでほしいと思い、L男の思いやペースを大切に、日々の練習の参加の形をL男自身で決められるよう配慮した。当日M男のフォローをする姿から、L男の心の中に今までたくさんの友だちから優しくされたり手伝ってもらったりした嬉しさがあり、自分もM男のお手伝いをしたいと思えたように感じる。また、D男も日々の生活の中でL男の良さや個性を理解していたから、怒らずに譲ってくれたように思う。これからも友だちを思いやり、助け合う気持ちを育ていけるよう、思い合う姿をあたたく認め、たくさん褒めていきたい。

\*考察\*

行事に取り組む中で、特別な支援を必要とする子どもに対して自然と思いやり、フォローしようとする子どもたちの姿がたくさん見られた。日々の生活を共に過ごしたり、保育者が子どもたち一人ひとりの個性をあたたく受け止め、伝えたりすることで、子ども同士の間でもそれぞれ異なる友だちの良さや個性を理解し、認め合う気持ちを育ていけることがわかった。何気ない日常生活の中にある、友だち同士で相談し、助け合う姿に保育者がしっかりと気づき、その都度あたたく褒めていくことが子どもたちの思いやりの心を育て大切な関わりの一つであり、子どもたちは褒めてもらった経験の積み重ねを糧に、行事を通してより豊かな思いやりの芽を伸ばし、自信を持って発揮できるようになるのではないかと考える。

(3) まとめ

- 幼児が特別な支援を必要とする場合でも、その発達段階や経験を考慮して、生活や遊びの中で配慮は必要であるが、クラスの中で“特別な子”とならずにお互いが平等な立場となるよう、できることに目を向け、一人ひとりの良さや個性を十分に認め、褒めていくことが大切である。
- 子どものありのままの姿を受け止め、一人ひとりの成長の姿をしっかりと捉えて把握し、その発達に応じて保育者が子ども自身の力を信じて見守ることが大切である。
- 生活や遊びの中で子ども同士が相談し、助け合う姿に保育者が気づき、一人ひとりの優しさや思いやりの心を十分に認め、自信につながるよう褒めていくことが大切である。
- 園全体の保育者同士で職員会議において情報を共有したり、保育後に職員同士で話したりする中で、さまざまな角度から分析し、子ども一人ひとりの発達段階を深く理解し、密に話し合い、信頼関係を築きながらあたたく育てていくことが大切である。